

## 「飛鳥のお寺」を聴いて

聴講日：H30.3.3  
むきばんだやよい塾第18期

### 飛鳥寺

“飛ぶ鳥”と書いてなぜアスカと読むかは、枕詞から来ていて、飛ぶ鳥とは水鳥のことです。万葉集の巻19に以下のような歌があります。

皇者 神尔之座者 赤駒之 腹婆布田為乎 京師跡奈之都  
おおきみは 神にしませば 赤駒の 腹這うたうを 都となしつ 4260 大伴御行

大王者 神尔之座者 水鳥乃 須太久水奴麻乎 皇都常成通  
おおきみは 神にしませば 水鳥の すだくみぬまを 都となしつ 4261 作者未詳

大和盆地の一体は湿地帯が多く、大海人皇子が大規模な灌漑工事をして都を築いたのだということを讃えた歌だそうです。当時はこの湿地帯に水鳥がたくさん棲息し、その水鳥が空を舞っている風景から飛ぶ鳥がアスカの枕詞となり、ついには“飛鳥”をアスカと読むようになったのでしょう。

日本に仏教が公式に伝えられた時のことは史書に記載されています。『上宮聖徳法王帝説』によると538年、『日本書紀』では552年と伝わった年に違いがありますが、百済の聖明王から釈迦如来像と仏具・経論が贈られてきたことが記載されています。

欽明天皇は、大臣蘇我稲目にこの時に贈られた仏像の安置と礼拝を許しましたが、仏教の受け入れに反対する大連物部尾輿の讒言により、破却されました。

飛鳥寺造営の経緯は、『日本書紀』や『元興寺伽藍縁起并流記資財帳』にみられます。それらによると、蘇我馬子は飛鳥真神原にあった衣縫造祖樹葉の家を壊して造営を開始し、それから約20年をかけて完成しました。

飛鳥寺の伽藍配置は、一塔三金堂をもつ「飛鳥寺式伽藍配置」とよばれ、その起源は清岩里廃寺(高句麗)などに求められるのではないかと考え方がありますが、飛鳥寺と全く同じ伽藍配置をもつ寺院は、現在のところ他にありません。

飛鳥時代に創建されたこの寺は、およそ1,400年の間に落雷等で二度の火災に遭い、本堂までも失ってしまいます。そして一時は廃墟となり、雨ざらしのまま打ち捨てられていたとも言われます。現在の飛鳥寺の建物は江戸時代に再建されたものだそうですが、江戸時代には、門などもなく、かりそめなる堂に本尊が安置されているだけだったそうです。

そして飛鳥寺と言えば、日本最古の大仏である「飛鳥大仏(釈迦如来像)」が有名です。中国から渡来した仏師、鞍作止利という人の手で造られ、東大寺の大仏よりも150年以上も前のことで、飛鳥時代からずっとこの場所に座っておられます。

飛鳥寺は、1956年から奈良文化財研究所の坪井清足氏などによる発掘調査で、主要な堂塔がみついています。以来、現在まで飛鳥寺とその周辺の発掘調査を継続し、伽藍の様子や寺の範囲などが、徐々に明らかになりつつあります。

1981年の調査では、大仏の台座は花崗岩ではなく、竜山石(凝灰岩)製であることが分かりました。また、その上の須弥座は後補と思われていましたが、内部に当初の竜山石(凝灰岩)製の須弥座の一部が残存していることが分かり、このことから、石造の台座は当初から銅造釈迦如来像を安置するために造られたものであり、飛鳥大仏は飛鳥時代から同じ場所に安置されていることがあらためて確認されました。

飛鳥の地はそんなに広い領域ではなく、甘樫丘から見渡せる東西500m、南北2.5kmの範囲に過ぎないですが、その飛鳥川流域に飛鳥寺、川原寺、橘寺、山田寺、奥山廃寺など多くの寺が存在しています。これは飛鳥寺の造営に続き、氏族たちが競って寺院を建立したからです。建立された寺は瓦葺屋根、朱塗りの柱、緑色の連子窓と、現世と全然異なる文化・世界を人々に示し、驚愕の世界を現出させたのでした。

この飛鳥寺を建立した蘇我氏は堅塩媛と小姉君の二人の娘を欽明天皇に嫁がせ、用明天皇、崇峻天皇、推古天皇の外祖父として絶大な勢力を誇っていました。聖徳太子にも蘇我氏の血が混じていました。

## 大官大寺

権力の絶頂期にあった蘇我氏ですが、乙巳の変で権力の中枢から排除されてしまいます。その少し前の639年には天皇家最初の寺として、舒明天皇が大宮(百濟宮)と大寺(百濟大寺)の造営に着手しました。日本書紀の欽明天皇条に次のようにあります。

*秋七月詔曰、今年、造作大宮及大寺。則以百濟川側爲宮處。是以、西民造宮、東民作寺、便以書直縣爲大匠。*

*秋7月。詔して言いました。「今年、大宮と大寺を作らせよう」すぐに百濟川のほとりを宮の場所としました。それで西の民は宮を作り、東の民は寺を作りました。書直県を大匠としました。*

1997年から5年間に及んで実施された発掘調査により、巨大な金堂跡が確認された奈良県桜井市にある吉備池廃寺がこの百濟大寺にあると、ほぼ断定されています。百濟大寺の造営は舒明天皇の崩御後も皇極天皇や天智天皇に引き継がれ、百濟大寺から高市大寺、大官大寺と移建・改称され、大安寺になったことを記す『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』には、蘇我氏の飛鳥寺を遙かに凌ぐ九重塔が建立されていたと伝えています。

しかし、大官大寺は建築途中の和銅4年(711年)に火災により全て灰燼に期しました。この焼亡時の建築進捗状況は、金堂と講堂は完成し、塔本体は完成していたものの基壇化粧などの最終工程には至っていなかったようです。また中門、廻廊はまさに建築途中であったと「扶桑略記」に記されています。昭和48年から57年頃まで行われた発掘調査で、大量の焼土や焼けた瓦が発見され、その信憑性が裏付けられました。さらに創建時の中心伽藍の規模と配置も明らかとなり、塔はその基壇規模などから伝承のとおり九重塔であったと推定されています。

現存する土壇は講堂の土壇であろうと考えられてきましたが、これとは別に講堂土壇跡が発見され、現存する土壇は金堂土壇であることが明確になりました。そして礎石跡などから、金堂の大きさは当時の寺院規模を遙かに上回り、藤原京大極殿と並び立つ規模であったことが明らかになっています。

扶桑略記や大安寺資財帳には「文武3年6月に九重塔を起こした」とあり、発掘調査でも土壇や心礎等の礎石の大きさからほぼ裏付けられています。その大きさは、まさに国家筆頭の大寺の塔として相応しいものであり、高さは東大寺七重塔の高さ約100mに匹敵するものであったろうと考えられています。

### << 付録 >> 高市大寺の所在地

平城京大安寺の前身寺は大官大寺で、その前身寺は高市大寺、更にその前は百濟大寺です。発掘調査の結果、百濟大寺は吉備池廃寺であることが、現在最も有力な説となっています。高市大寺の所在地は、大官大寺跡が最も有力な推定地でした。日本書紀天武天皇条にも次のように書かれています。

*戊戌、以小紫美濃王・小錦下紀臣訶多麻呂、拜造高市大寺司。(今大官大寺、是。)*

*12月17日。小紫の美濃王・小錦下の紀臣訶多麻呂を、高市大寺を造る司に拜命しました。  
(今の官大寺はこれです。)*

しかし、発掘によって出土した遺物からこの遺構の着工時期は文武朝を遡ることがないことや、遺構の下層には建物遺構が一切発見されないことから、この推定は成り立たないことが確定的になりました。このように、高市大寺の所在地問題は、再び白紙に戻り、現在、いろいろな説が検討されているようです。